

新春特集号 特別企画・紙上座談

# 在宅医療座談会

## 2040年に向けて考える



長年、在宅医療/訪問診療に尽力してきた先生方に、▽在宅医療を意識するきっかけ、▽医科歯科連携、▽ケアマネとの連携、▽労働生産年齢層の減少と高齢人口の増加が一層進むに2040年に向けて、医療者が考えるべきこと―について大いに語っていただいた(司会:藤田倫成新聞部長)。

### 座談会メンバー

- 野村 良彦先生(野村内科クリニック・名誉院長)  
千場 純先生(まちの診療所つるがおか・名誉院長)  
石川 茂樹先生(原宿わたなべ歯科診療所。元石川歯科医院・院長)



## 目の前の患者を救いたい



千場純先生

お一人とも日本医師会の赤い大賞を受賞されていたらしいですね。野村先生と石川先生の在宅医療を始めたいきっかけは何かですか。

【野村】1982年に横須賀市立市民病院の呼吸器内科に赴任して、がんの方を多く診ていました。さほど大きな病院ではないため、内科系は何でも診ていました。

病院で亡くなる御家族は「お世話になりました」と言ってくれます。しかし、本人は白い壁に囲まれた病院の一室で、管をいっぱい付けられて過すより、本当は家にいたかったのではないかな、と気づきました。これを解消するには、「自分が在宅医療をするしかない。」と思うようになった。

【石川】僕は開業間もなく隣の一般病院から、交通事故で頸椎損傷をした方が「入れ歯が……。」とおっしゃるとの依頼を受け、技工用エンジンを持参して治療したことがきっかけです。当時は訪問診療や往診をする歯科医師はほとんどおらず、一人を診ると、他の方々からも要望をいただくようになった。

歯科と内科で訪問診療の出だしが違つうに思われます。医師は昔から往診の形式で在宅医療を行って、社会的地位を確立されてきたと思われま。ところが歯科医師・歯科医療にはそういった認識が薄かったように思います。患者からは「歯科用チェア(ユニット)ごと持ってくるのですか?」と尋ねられたこともあり(笑)。

はじめは手探りで、医師や看護師の略語が分かりませんでした。知ったかぶりはしないで分からないことは聞き、略語辞典も購入しました。

【藤田】略語は分かりにくいですが、医師同士やスタッフ間ですら伝わらないことがあります。

## 情報を共有できる関係性に

そんな折、在宅医療に取り組んでいる某老人病院の院長にお招きいただきました。在宅医療に本格的に取り組む始めたのはここからです。野村先生が先駆で、僕らが二番手だったかな。2001年の末くらいでした。当時から往診にも積極的に取り組んでくれた先輩の診療所(三輪医院)を引き継ぎ、白衣を脱いで街角に出て行く医療を志しました。今は社会福祉法人の会「まちの診療所つるがおか」の名誉院長として「まちづくり系在宅医」を自称しています。

【藤田】医科歯科連携についてはいかがですか。

【千場】ケアマネや訪問看護師は医科と歯科を別物に考えがちです。例えば、患者の歯の具合が悪いとすると、歯科医師には連絡しますが、歯科受診の報告が医師に届かない。「あれも歯医者さんへ通っているのですか?」ということになります。

【石川】そういった事例はたびたび耳にします。昔、脳梗塞で抗凝薬を服用している患者の抜歯をして、怖い思いをしたことがあります。

私が歯科医師へ訪問診療の講演をする際は、技術的内容はあまりお話ししません。訪問前に頭に入れておくべき全体像や、患者家族・ケアマネ・担当医たちと取り組む際の留意点をお伝えしています。私は歯科医の関与を担当医へ文書で伝えています。お返事の有無は人によりますが、

【千場】当時はヘルパーが医師と直接意見を交わすことなどなかった時代でしたから、初めは遠慮がちでした。印象深いのが言葉の問題です。ケースカンファレンスで我々が当たり前に「コンチューしてください」と言ったところ、介護関係者に「え、虫(昆虫)を入れるの?」と真面目に



野村良彦先生